

生きて生きていつか話そうよ　　きったか 榮一

「面会時間は五分なんだよ　それも週二回まで」

「ウフフ」　コロナ禍のながい空白の中のかすかなたしかな　笑顔だ

わたしの「ころのど」かに　灯がともった

本市とお隣の市が共同で設立した組織の　救急車が出払い　受け入れ病院もフル稼働
という　あの二十二年四月半ばの　非情な夜明け前を思つと　夢のような幸せだった

あの時　宇部中央病院から「手が空いたので受け入れる」の一報が入り

「すべては救急の遅れに尽きます　後少し遅かったら命もあやうかった」と医師の

お話を聞く

横たわる妻の手を握ると　しっかりと握り返してきた

先生は「だれにでもそつします」と笑った

嚙下機能(反射運動)を失います　言語野にも影響が出るかもしれません

二つのリハビリを個室で一か月半続けたが　なんの効果も無かった

病棟に移ると「コロナ禍で　家族も入れないから　病室の様子を動画に探つてあげ

まじょじ」

女性の看護師さんの呼びかけの効果的なことに　驚かされる

「橋高さんさん　手を振ってー　分かる？」——ママが(ゆっくりと手を振りながら)

「てぞかかると答える　会話の《注目点》を正しく認識できてる　いいぞー

「こんどまたね」——また　こんど

先生も他の人もママが　話せるとは思っていないようだと言った

それは　小野田赤十字病院に　六月下旬転院しても　同じであった

妻の実情を知るため　日本人とネイティブの「英語発音」を「見える化」した

《PARTS》で　増幅度を上げて子音+母音の領域を細かくしらべると　別れ際

にママは／＼ARRIGATO／と声を発していた！

ママの病室は 病院の一番南の 塀で囲まれた部分にあった

会えない日々私は 海辺の散歩帰りに 塀のこちらから「マーマ がんばれよ 元氣
だせよ」と小さく つい大きく 呼びかけるのだった

塀のこちら側には介護老人施設があり 二五年二月末に 改組されて『小野田赤十字介護医療院』
となりママも移った

一月から五月にかけ入院と手術を繰り返したわたしが 挨拶に伺つと声がかかった

「あなた 奥さんの部屋に向かつて 叫んでたでしょう 有名よ」

医療の充実で新天地に移った人たちだった

二〇二六年二月二十一日 了